

報



會

會 岳 山 本 日

88

月 九 年 四 十 和 昭

再び山を畫いた
遺品に就て

中村清太郎

昨年七月の本會報に出た「山の繪の傳統」の中で、山の描かれてゐる遺品の幾つかを擧げたが、その後觀直した二三に就て補遺を兼ね少し記して置き度い。(以下は總て大和法隆寺所藏のものに係る)。

一、法隆寺金堂天蓋の繪

金堂内陣西之間に天井から吊された天蓋、その内部垂板の部分に山の繪がある。何分暗い室内の而かも高い處に在る比較的小さい繪なのでハツキリは判らないが、圓味のある山の處々に松とも見える針葉樹の立つてゐる圖で、墨線に白と綠青の色彩がある。裝飾的ではあるが、又カナリ自然な趣を有つてゐる。同じ様な繪が幾つも並んで天蓋の内部を匝つてゐる。尙ほ天蓋には天井など各處に寶相花が描かれ、外部は天人鳳凰等の繪や彫刻で飾られてゐる。この天蓋は飛鳥時代の作と認められてゐるものだ。

二、同三尊佛像臺座の繪

金堂土壇上の佛像、中央釋迦三尊左右彌陀藥師の三基の臺座の背面に、山水圖が辛うじて見分けられる位に残つてゐる。之は惜しいもので正面など何かで拂拭したやうに全然

影を止めてゐないし、側面も剝落と汚損の爲め二天らしい像が僅かに物色されるに過ぎない。背面の山水圖とても、東脇の山や木の形が比較的よく判り、中央の山形や流水の姿が認められるものゝ、大體朱や綠青や白など顏料の殘痕を辿つて、山か樹木か朦朧と隱顯する程度になつてしまつてゐるのだ。尤も明るい光りの下に觀るなら餘程要領を得るかも知れないが、中央と東の臺座は飛鳥時代の作、西のは鎌倉と判ぜられてゐる。

三、同壁畫

前から金堂壁畫に描かれてゐる山に就てはカナリ印象を留めてゐたものゝ、年月に連れて朧ろになり、堂内の暗さに見過した所もあつたわけだが、去年偶ま石井鶴三君と話し合つて記憶を新たにし、昨秋は懐中電燈で少し仔細に觀た所、今更の如く山がそこで重要な役割を持つてゐるのを感じた。而かも金堂内の大小壁畫の七八分通りまで、山がその構成に與つてゐることが分つた。記憶の二三に止まるのと違つて、寧ろ意外な程だつた。

即ち山の描かれてゐる畫面は、四面の大壁のうち西方の阿彌陀淨土圖、八面の小壁では唯一つ南面東隅だけが剝落の爲めか不分明であるのみ、餘は皆夫れ夫れ菩薩像の足下に山影が伴つてゐる。殊に北東隅の普賢や十一面觀音では最も明瞭であ

る。何れも此處の壁畫特有の力強い而かも伸び／＼した線を以て、或は急に或は緩やかに、直線的に又曲線的に山の諸相を描破されて居り、東北角の小壁など綠青の生ま生ましく残つてゐる處もある。

思ふに大覺者にして救世の悲願を有つものゝ佛菩薩の、或はその住み給ふ淨土を、或はその救ふべき穢土を現はす爲めの山の姿であらう。例へば小壁の觀世音菩薩では、その虚空に遍滿する感を現はし。人間の憂苦を拔濟せんが爲めに現世に臨む意を示さんとして、こゝに山がその裳の下に描かれたものと見られる。されば菩薩の尊像に比して山が著しく小なる割合しか占めてゐないのは菩薩の偉大性が強められる所以であらう。又西大壁の阿彌陀淨土では佛と兩脇侍との間即ち背後に、山の傾斜、斷崖か岩窟を思はせる景象が描かれてゐるが、蓋し淨土の美と壯嚴を現はさんか爲めに外なるまゝい。何れも畢竟、山岳といふものゝ地を挺んで、天に接する心持ちと、その崇高その壯嚴此の世のものとも思はれない性質とが、此等の圖中に無くてならぬ要因となつてゐるに違ひないと思はれるのである。

この壁畫の年代に就ては異説もあるやうだが、やはり白鳳時代といふのが首肯すべきものであらう。

四、同百濟觀音光背彫刻
之も金堂須彌壇上に安置してある

彫像だが先年永く奈良博物館に出陳されてゐたもの、虚空藏菩薩といふのが正しいかも知れない。この像の光背は推古佛特有の所謂竹光背といふ形式だが、その竹形に刻まれた支柱の基部即ち竹の根元の所に山形の彫りがあるのだ。

之は自分は前に幾度も見ながら少

目 次

- ・再び山を畫いた遺品に就て
- 中村清太郎... 一
- ・無題..... 加納一郎... 二
- ・私の山行き... 石田嘉郎... 二
- ・佛蘭西山岳會誌より
- 藤島敏男... 三
- ◆雲南の雪山... 望月達夫... 四
- ・戦線便り
- 齋藤・豊田・佐藤... 八
- ◆會務報告..... 九

しも氣が附かなかつたものだが、石井鶴三君が嘗てこの像の修理の折に出會つて見付けられた話をされたので大に興味を感じ、今度は暗い壇上の像に無遠慮にも電光を向けて檢べた所、漸く局所に波ともまがふ山形のカナリ深い彫りを認め得た。之も考へて見ればやはり壁畫の菩薩像の

袋下に山を描いたのと異曲同工の類であらうか。そして前記臺座や天蓋の山は、壁畫の淨土圖の意を同じくするものかも知れない。

尚以上の外に前同述べた玉蟲厨子須彌座の繪を加へると、この我國古代美術の中核ともいふべき法隆寺金堂内に、山の姿の占むる地位は、思ひの外に重要なものではあるまいか。

無題

加納 一郎

よく草稿の終りに括弧などして執筆の年時を書きこんだのが、そのまま活字になつてゐるのを見かける。先在權が問題になる學術論文のたぐひや時事問題を取扱つたものでは、かうしたことも必要であらうが、普通の文では讀者にとつて、それは十中の九は用事のないことである。書かれた事實と脱稿との間の時隔がわかるのも場合によつて興味をそゝられるけれども、なかには編輯者の机の抽出の中で幾たびも締切日を見送つてゐたことがよく判るやうなものもあつて、味氣なく思はれることである。心を配つてしたゝめられた立派な文のあとに(一九三九・十二・二十一)などと年號と月日の數字の書きあらはし方の亂れてゐるのなど、禮服のお尻に絲くづが着いてゐるやうで、イヤハヤ。

これと反對に紀行文などで、いつのことかきつぱり判らないものが、かなり多い。古い雑誌などひとつくり返して探した時など、昨年とか、この春といった書きぶりにぶつかると思ひがなくなる。じつくり讀めばその内容から、また刊行の日付から、およその見當はつくとしても、参照の際にはそれがなかなか面倒である。筆者はその時かぎり讀みすてにされて苦しい積りなのかも知れず、そんな書きなぐりに参照價值などあるものかといつてしまへばそれまでである。しかし積雪期の紀行報告などは、かきなぐりのなかにでも案外参考になることが書いてある。日だけあつて月の記載のないものでは、雪の状態が如何に精彩に描かれてもつても死文に等しからう。記事から逆に月くらゐ推定ができさうなものだともいへるが、それはその人、その場所によるので一般には通用しない。去る二日何々小屋に泊り、三日何山を目ざして登りしも何々で撃退されましたといった通信文にお終ひまで月の記入がないと、讀んで無駄をしたやうな氣がする。風雅の人は文中に無愛想な數字の介入を好まぬといふこともある。さういふ場合に、時間記録などを別項にして誌すのも一法で、よく見かけるところであるが、これにも年の記載が缺けてゐる後日人を迷はしむるもの少しとしない。

本縣とか本會とかいふのも、これと同じでたゞその一小範圍に限つて意味のある言葉で、普遍性を缺いてゐるのであるが、それに氣づかず用ひられてゐることが多い、視野のせまい中以下の役人などはことにさうした淺い考へ方に陥り易いやうである。

さういへばこの會報でも、これほど立派な出来栄になつて、もつと廣く誰彼にも愛讀をすゝめたくなつて來たが、たゞの「會報」では甚だ不便なのである。額のなかの會章も、これはなかなかよい圖案であるけれども、郵便や赤十字の印のやうには世間で知つてゐてくれないから困る。そこでこの會報も、題字を「月刊山岳」とでも改めて、脇に日本山岳會編輯と大きく入れることにしてはどうであらうか。定價金何錢として賣出せば、大いに賣れるだらう。ナーニ、賣れるものか。いや實は賣れなくても構はないのである。あまり賣れると、コレばかりとつて、會員になるものがなくなる懼れがある。だから會員外にはいつも品切れ、賣切れであつても差支へない。それでは何にもならんではないかといふ。いや大いにあるのである。改題して定價をつけて、誰にでも賣るものにしたら、三種郵便物といふ有難い認可がえられるのである。三種郵便に較べると、吾々は現在六倍もの高率運賃をこの印刷物のために毎月支拂つてゐるのである。それが助

かる。なほこれまでは發行が遅れ勝ちでおまけに盆と正月は休刊だつたが、そんな勝手は許されないうことになる。編輯者には洵に迷惑極であらうが、會員に代つて、遞信局から鞭撻してもらふことになるのである。

私の山行き

石田 嘉郎

九州の山は御承知の通り千米級許りである。雪溪やお花畑など夢にも難しい。幼時私の郷里葛城山には酸漿の野生があると聞いて子供心に胸おどらせ昔お城のあつたと云ふ其の山に登つたが城の跡と云ふ事は背かれても酸漿など一本も見當らなかつた。然しそれから山が好きになつた。狭い田舎で其山が一番高いと思つたのにまだ彼處にも此の方にも葛城山よりも高いのが澤山見えるではなにか、よしそれでは次はあの山だ此の山だと目あたり次第登る内に山の名も聞き傳へに憶へ山登りが面白くなつた。無論地圖など持つて行かず又必要がなかつた。大人となつては子供時代と考へが變つて來て只漫然と山に登る征服する等の幼稚な心境は無くなり圖面に依り成可く人には尋ねない事にする方をつたものでずるぶ馬鹿な事とした。地圖を案じて此の山に登ると計畫を立て乍ら頂上迄到達し得なかつたり妙な處の

藪の中に入り込んだり乗つた自動車谷間に落ちたりして散々な目に會つた事もあつた。そこで之では不可ん、田舎の山でも馬鹿にならんと山に關する參考書を見圖面に熟れる事に心掛けた。そして私達の先輩工藤氏や北田氏の御指導でどうやら山の山たるものが分つたやうな氣がする山低きが故に侮らず高きが故に恐れずと云ふ信念が生れた。私の山行きはいつも一人、それが結局意のままに目的を達せられ人の意志を忖度の要も無く吞氣で之はちと現代日本の集團訓練共同一致の精神と馳背するやうであるが云はゞ「吾がまゝな」私の山行に共鳴する人が私の周囲に見當らないのでやむを得ないことであつた。所がやはり最近私の氣持に賛同するつれ人が出來て遭難しても大丈夫だと思つてゐる。九州の山で遭難? と不思議がる人もあらうが遠くは久住山で近くは阿蘇外輪で學生教授の方がそれ〴〵證人となられた。何れも私の主義と同一單獨登行で濃霧と寒氣の爲めとそれに餘り軽く山を見られたのぢやないかと思ふ。先年阿蘇の中岳で濃霧に遭つた時參考書に「木の無い所は石ころが積んであるそれを目當てに行けば道に出る」を思ひ出して石積みを探し山小屋を發見した時の嬉しさは今でも忘れない。日本アルプスなど行かれた人が讀まれたら私の山行きなど只ハイキングに過ぎないであらう。又私自身も左様思つて居る。趣味と

佛蘭西山岳會誌より

藤島敏男

五月の會報八十六號に書いたあと JAC圖書室へ届いた、ラ・モンターニュ五冊目を通して見た。

三月號(三〇五號)の巻頭には、昨年崩御された「ローマ法王ビートル一世謁見記」が載つてゐる。佛蘭西山岳會の名譽會長が一九三五年ローマで、山岳會編纂の「登山術」二巻を、即位前には一流の登山家としてきこえた法王に獻納のためヴァチカン高殿に参内謁見した折のことを書いてゐる。壯麗を極めた法王の謁見室で、白皮作りの装幀に法王の御紋章を入れた清楚な二巻の書物を手にされた法王が、若くおはしたる頃の高岳登攀の回想を物語り遊ばす内に許された謁見時間は既に「過ぎ去つた。退出するに際して「今やかの親しき山々を眺め得ざる余にとつてこの書を讀むことは、ひとつの慰めとなるであらう」との御言葉を賜はつたと筆者は謹記してゐる。

モンテ・ローザの伊太利側にひとつの新登路を開かれたり、その外にも大きな数々の登攀を敢行された法王が佛蘭西山岳會名譽會長の参内を機に在りし日の追憶に、山への情熱を蘇らせ給ふ模様が、よくこの短い一文の行間にくみとられる。同じ號には佛蘭西山岳會創立當時

の先驅者達に就ての一稿がある。それによると、初代の會長が鐵山監督局長とでもいつた官吏、二代目が下院議員。會の結成に功勞のあつた創期の會員には名家名士の多かつたことが窺はれる。この點は、日本山岳會誕生頃の發起人達が、年若い、ひたむきに山に登る青年であつたのと思ひ合はせると、たいへん興味が深い。

三〇六號には、モン・ブランの研究に大きな寄與をした、アンリー、ジョゼフの兩ヴァフロア氏の氣象觀測や地形測量に關する事蹟。次ぎにレオナルドダヴィンチの山に關する文獻といふ珍らしい稿が載つてゐる。この巨匠の書遺した文獻の中から山岳に關する部分を拾ひ上げて、ダヴィンチ果してモンテ・ローザに登攀せりや否やを論じてゐる。脚註によれば英國山岳會誌第十二巻に於てフレッシュフォールドも「レオナルドダヴィンチのアルパイン・ノート」なる題の下にこの問題を取扱つてゐる。

三〇七號の巻頭には、一九三八年七月四人の獨逸登山家によつて成就されたアイガー北壁の初登攀、同じ年の八月四人の伊太利登山家の成功したグラント・ジョラス、ウァーカイ峰北稜の初登攀に關する稿がある。

初登攀者達の閱歷、過去に於ける試登の經過及び初登攀記が簡略にまとめられて、登路を明示した美しい

寫眞と共に、好箇の讀物である。

同じ號には、モン・ブランで雪中野營をした經驗が載つてゐる。ポーターもガイドも備用せず、夫妻きりで、三千二百米以上の所に二十日、内七日間は四千八百七米の山頂に、全く雪中生活をしたのである。方法はエスキモー族の慣用するイグルー IGLUOO といふ形式の、寫眞で見ると形は圓形天幕に似たもの、之を雪のプロックで作つてある。居心地頗るよろしいふから、雑誌には懇切な構築法も説明してあるし、ひとつ我國でも試みてはどんなものだらう。

三〇八號は記事不足といふ譯でもあるまいが、スマイスの「クライム・ス・エンド・スキー・ランス」からシユレックホルンの章が譯載され、それに佛伊國境山地の地質に關する新刊の論評が過半を占めてゐる。

三〇九號にはドウフィネ・アルプスの名峰ラトール(三八〇九米)北壁の初登攀が光つてゐる。一九三八年八月二人の佛蘭西人によつて遂行されたこの果敢な登攀は、佛蘭西登山界に國際的榮譽を齎したものだと思つて、編輯者が附記してゐるだけであつて、寫眞をみても記録を讀んでも手に汗を握らせる。

重立つた記事は大體右に掲げたやうなものである。

新刊紹介もあるがガイドブックやうのものが多く、餘り注意を惹かない。前に計報を傳へたモウリス・パ

イヨンの遺著となつたフレンチ・アルプス第二巻が目星しい書であらう。

八月九月は例年通り休刊して三十一〇號は十月に刊行される筈だが、佛蘭西もアドルフ某打倒のために戦を宣したとあればCAFのメンバーも銃剣を執つてゐるに違ひない。次の號がどんな體裁で、いつ頃届くか氣懸りである。

本年度「山岳」の遅刊

第三十四年第一號は七月上旬に漸く編輯を終はり、校正刷りも思つたよりは早く出て、八月上旬には校了となつたが、さて印刷に取りかゝる段になつて、肝心の用紙がないと、印刷所では紙の入手を待たねばゐる始末。原因は當世流行の國策と統制經濟とあつては苦情を持ち込む所もない。そんな譯で會員各位の手許へ届くのが遅くなり誠に申譯ない。支那大陸に製紙の大資源發見とでもいつた情報が入らないのかと心待ちにしてゐる次第である。(編輯係)

會費拂込について

本年度の會費をまだお拂込にならない會員はなるべく早く拂込の手續を願ひます。振替貯金の口座番號は東京四八二九番です。(會計係)

雲南の雪山

キングドン・ワード
望月達夫記

まえがき 最近の情勢の現れとして、吾々山に關心を有つ者にとつても支那大陸の山々が一段と注目の的となりつゝある。只支那の山と一口に云つても、その中央部には雪線を遙かにぬき出た巨峰は絶無の様である。が新疆、青海西康、雲南の西藏境には無數の巨峰が亂立し、それらは五千米乃至七千米に達してをり、大部分が未登頂の山々であるばかりでなく、その地域も未探検、未測量の所が多い。

爰に譯出した一文は一九二四年のジェオグラフィカル・ジャーナル (Vol. 63 No. 3) 所収のもので、今日からみると幾分舊いものであるが、雲南の山について纏めて書かれてゐるものが殆どないので、参考になる點が多いと思ふ。

筆者キングドン・ワード E. Kingdon Ward は今日、アッサム及東部西藏に關する權威で、G. J. 及び H. J. に屢々寄稿せる外著書も多く、曾つて本會々報(第四十九號)に田邊主計氏が紹介してをられた。

(譯者記)

西部支那を旅した往昔の旅行家達が雲南の雪山については、何等言及してゐないが、之は甚だ奇異に思はれることである。が、その理由は簡單である。一般に旅行家は、山國を旅するに、雪山の多く雲にとざされてゐる夏の季節を選ぶものである。

この季節には、雪山は一日に一度か二日に一度位しか路上から見ることが出来ないので、旅人が餘程幸運に恵まれなければ、彼が大山脈の極く近くを通過してゐるにも拘らず、その存在をさへ知らずに過ぎて了ふことも間々あり得たのである。例へば一八七七年九月九日のこと、アタンツ H. Atunize の南なる Y. H. Y. La Palma Ia を越えた Gill は、彼の右方僅か二、三哩なる雪峰、而も天氣晴朗なればその峰々、氷河はいとも歴然と指示され得るその雪峰に關して何等書いてゐない。彼は只「五分間の僅かな時を除いては、終日斷え間なく雨が降り、霧が取りまゐつてゐた。」と書いてゐるだけである。

今一つの理由は次の通りである。之等の雪山の位する、この地方の西部の貿易路の多くは、深い峡谷の底につけられ、そして高峰は大部分之等の河谷より急に聳立してゐるので、河底の路からは、山々の姿がほんの僅かの間しか見られないことである。その故にこの地域に、暫らく滞在しないでは、雪山を見るの機會は殆ど無く、たかゞその位置、高度、範圍等に就いておぼろげな概念を得て通過して了ふのが、積の山である。一八六八年アタンツエから Merion Mekong に旅した Cooper は、アタンツエの谷奥一杯に展開し、又更に Merion の下りにも數分間は見える筈のカカルが Kalapo の山を見落してゐるのである。同じく一九〇九年フンカリン Congkaling (Baot の地圖では Congkaling) を訪れた M. Baot も、その僧院を見下ろして聳立する美しい雪嶺につては全く知らずに立ち去つた様である。彼が此處に滞在した日は、空は險惡で遂に雨がおちた。——この季節には全く珍らしい現象——と彼は記してゐる。此の點は特に不運でもあつた。それでも先頃此の地方の地質學上の時代が究明されてからは、雲南を横斷する者は大部分、その何れかの側の雪山に注意を向ける様になつてきた。殊に北西部に於ては、驚異的な景觀を見ることが出来る。即ちそこでは、あらゆる山脈から垂下する氷河はほぼ一〇、〇〇〇呎の低きに達し、又その多くは Merion 河自體に達してゐるのである。かくして諸河川の水源は非常に高所から流出してゐるものと思はれるし、サルウィーン Salween にも揚子江 Yangtze にも氷河が達してゐるに異ひないと思はれる。乍然今日では雪嶺から退却しつゝある氷の限界は、判つきりと區別せられ、雪峰は夫々孤立して了つてゐる。

近時探検家の注意が雲南に拂はれる様になつたにも拘はらず、雲南の雪山について知られてゐることは、到つて僅かである。何人も未だ、雲南に於ける雪山に登つたことはない。今日地圖に認めらるゝ之等の雪山の位置は、多くの場合間違つてをり、その範圍も亦甚だ不確實である。

雲南の標準的地圖は General H. R. Davies の作つたものである。彼の著書 "Yunnan; The Link between India and China." ("雲南、印度及支那の連結部") 中には、雲南の雪山に就き幾分の記述があるけれども、彼の作つた地圖には全く記入されてゐない。雲南、四川及その近傍地域の關係は、印度測量局發行のチベット地圖に依つて明瞭であるが、その一九一九年版には、雲南には唯一つの雪山も記入されてゐない。正にその編纂者は、ヒマラヤ主脈の光輝燦爛たる雪山によつて盲目にされた如くである。それ故に私が以下に述べんとする雲南の雪山のことも、畢竟その證明に外ならない。之等の覺書は一九一一年、一九一三—一九四年、一九二一—一九二二年の三回に互つてなされた私の旅行を通じての觀察の要綱であり、又將來の探検家、登山家にとつても幾分有效であると思ふのである。

雲南の雪嶺は元來、チベットにその源を有する山脈の南方へ延長隆起したものである。過去に於ては、之等雲南の山脈はチベット高原から派出された支脈であると考えられてゐた。けれ共この「支脈」(Spur) と云ふ言語に何んな意味があらうとも、この見解は誤つてゐる。之等の或るものは正に獨立せる隆起と見てよい。之等の平行した山脈は、南方へ行くにつれて低くなり、分散して了ふ。そして雲南に於る雪山は、その確定された山脈の末端に位してゐて、チベット本土に於る程に壯嚴雄大でもなく、又無數でもない。

扱扱は、ビルマ側からの旅行者が先づ指摘しうる雪山と云ふ理由から、リキヤン山脈 Likiang から説明を始めやうと思ふ。その南方七十里には大理山脈 Tai と云ふ最近迄氷河に覆はれてゐた山脈があるが、おそらく今日ではリキヤン山脈が雲南に於る最も南の雪山であらう。

リキヤン山脈

一八九八年の遠い昔に、リキヤン山脈を見得る地域内に、數人の旅行家が這入つたにも拘はらず、リキヤンの雪山について最初に注意を向けたのは、フランスの旅行家 Cuvillier-Coutellemont であつたと思ふ。大理から北、Weiss 若しくはリキヤンへ通する主要路からは、リキヤン山脈の美しい景觀が、Kiechuan 溪谷の源頭に眺められる。更に東方の Yunghai 溪谷の近傍からは、リキヤン溪谷の源頭に聳立するこの山脈の最南端の峰から、北方揚子江がこの山脈を切斷して流れる地點に至る、この山脈の全貌が明らかに見ら

れるであらう。

リキヤン山脈をぐるつとまはる揚子江の屈曲流が発見されて後、この雪嶺(當時は雪嶺とは考へられてゐなかつたが)が著名になつたことはたしかである。一般に認められてゐる様に河川はある障害物によつて流れの方向を變化せしめられ、その縁をめぐつて流れる事を餘儀なくされる。その見解の如く、リキヤン山脈の樞軸は南北に走り、揚子江はこゝに於て一旦北東に流れてから、この山脈を切斷して東南南方へ向いてゐる。事實この山脈は揚子江の對岸へも續いてゐるのであり、揚子江はこの山脈を切斷して深い峡谷の底へたぎり下つてゐる。

一九一九年ヴィヤナで刊行された Handel-Mazzeiti の地圖で、リキヤン山脈ははじめ、Yüling Shan と云ふ確定した山名を記入されてゐる。彼はこの主峰(“Saiselo”と記さる)の高度を、五九〇〇米突とし、後これは五八一五米突と訂正された。彼は又私に手紙を寄せて、右の高度はリキヤン(Lidjiang と彼は綴る)の上方三三四〇米突の地點からの寫眞測量によつて得られたものだと言つてゐる。この山脈の最高點は一九、〇〇〇呎以下なる可く、或は二〇、〇〇〇呎に達してゐる可く解される。

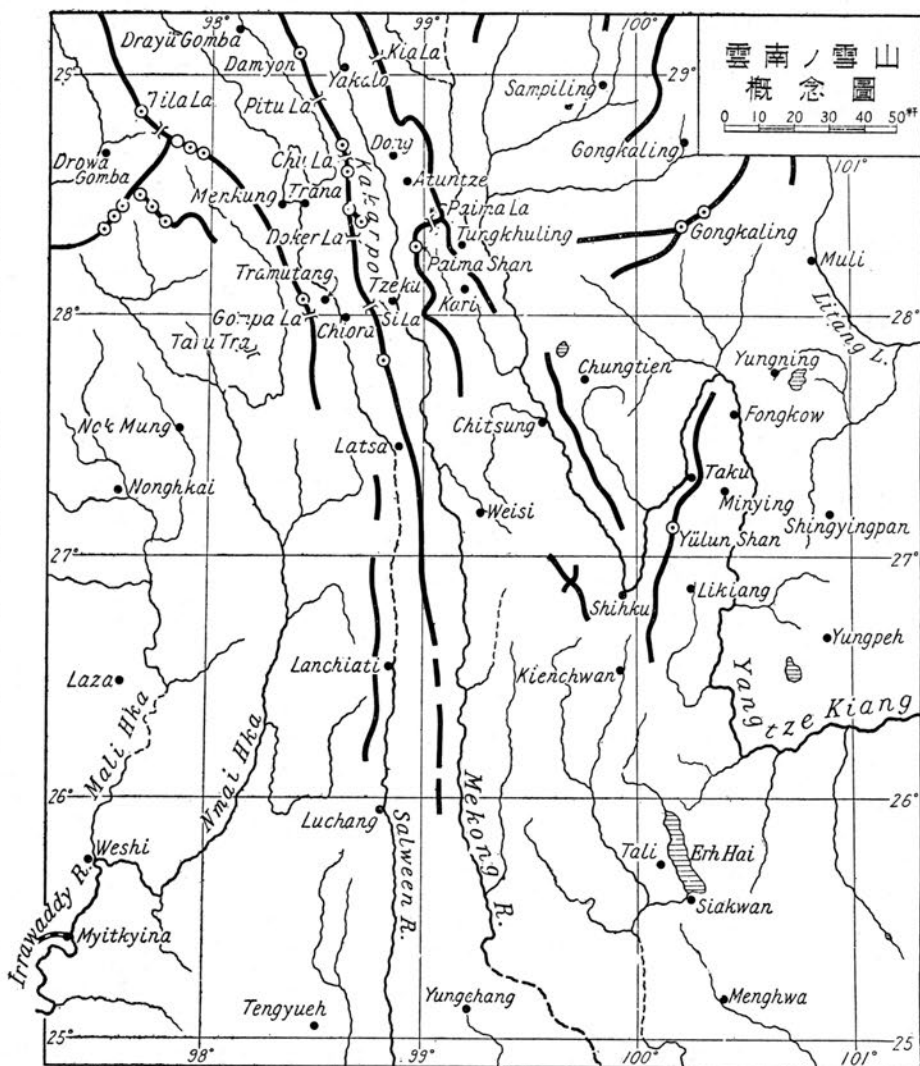
(G. J. 編者註・著者は手近に諸文獻を得ることが出来なかつた爲か、リキヤン雪峰の初期の記述に

つき幾分の誤謬を冒してゐる。Bonin はその一八九五年の旅行の記述中に、萬年雪に覆はれた、五〇〇〇米突を超える二つの峰につ

年彼に先行してこの地に來た Li-tsoa も雪の大山脈について語つてゐる。)

リキヤン山脈の南端部(Kan-hai-

主要路は、揚子江屈曲部の中心を通り、この山脈の東麓に沿ひ、次第にそれから遠去かつてゆく。最初の二日間に、氷河から流れる Paishui-



き言及し、且その間を揚子江が流れてゐると書いてゐる。又 Gervais-Courtellemont が此の地に來たのは一九〇三年のことであり、同

方なる Chungtien に至る主要路が通じてゐる。一方 Yungning に至る

カカルボ Kakarpo
此の山のことは、クーパー Cooper もギルも書いてゐない。嘗て Tzoku にやつてきた Prince Henry によつて、アタンツェに遣はされた M. Roux は、メーコン右岸に在り、美しく氷河をもつたドカアル・ラ Dokar La の三つの雪峰を觀察し、その高度を約一七、八七五呎と測定した。Da-

た路を辿つて行くことが出来る。この山脈の東面にある Paishui を育む大氷河は、今では數哩も退却し、まだ明らかに後退を續けてゐる。このことは他の氷河についても同様に言ひ得ることである。Kan-hai-tzu の湖は既に全く姿を消してゐる。かゝる湖はこの東面上、Paishui の直ぐ南にも存在する。リキヤン溪谷の源頭にある湖は同様に消失しつゝあり、今日では僅かに濕地を呈する程度である。又リキヤンの谷若しくは平地は正に往昔の湖の底部をなしてゐたものである。湖に棲息せる貝殻を含むこの附近の平地の砂利や砂の地層が正に右の事實を證明してゐる。一九一四年印度測量局刊行のチベット及近傍地域の地圖に於ては、リキヤン山脈は雪嶺として正確に取扱はれたが、その一九一九年版には、不思議にもその記入がない。しかもその長さは約四十哩とされてゐる。尙雲南に於ける他の多くの雪山と異りリキヤン山脈は主として石灰岩からなつてゐる。

vas と Ryder とはアタンツェの直ぐ北なる Dong Gorge から二つの峰を見、クリノメーター測定によりその高度を二〇〇〇呎と算定した。又 Handel-Mazzetti はその地圖に、この峰を約六〇〇〇米と記してゐる。一方 Prof. J. W. Gregory は、かなり遠方からこの峰を見たのみであつたが、その最高點を二四、〇〇〇呎と測定した。カカルボの降雨量はベエマ・シヤン Paima Shan に於けるよりも遙かに多量である處から考へて、この最高峰が二二、〇〇〇呎を超えてゐるとは考へられなうのである。

峰はサルウィーン谷の Menkung のすぐ下なる Tana から見る事が出来る。カカルボは聖なる山であり、その六つの峰の中の何れかは、巡禮者の廻る回路の如何なる處からも見得るとされてゐる。私がドカアル・ラを越えた時、Lakorah に於て急流となつてサルウィーンに注ぎこむ大水河を見た。乍然この西側にかゝる水河があることや、又その近くの峰々の記述は殆ど見當らぬやうである。これは疑もなく、サルウィーン、イラワディ Irrawaddy 間の分水嶺が、非常に接近し難いことから由來してゐる。

ドカアル・ラからは、最南端の水河の脚部に到達し、かくしてその最高峰に登ることは簡単に思へる。又同様にしてこの山脈北端の峰はチュ・ラから達せられた。M. Baot が一九一〇年ドカアル・ラを越えた時、彼はカカルボの水河に接した。がこの峰をカカルボとは呼ばずに、幾世紀もの昔荒涼たる雪の眞只中に住んでゐたと、この地方で傳承されてゐる Koa Kerbo と名附ける聖者の山々と云つてゐる。これ以來この山の名前は聖なる山とされた。乍然カカルボ ("dkar po") は「白」を意味し、「Ka」(ka) は「雪」を意味する。之は東部チベットに於けるその他の無名の雪山に共通な表現でもある。例へば Kangri Karpo と云ふ様に。この故にこの山の意味は右の説明の方が遙かに簡明にして妥

當なりと思ふ。カカルボは新版の印度測量局の地圖に記されてゐるが、リキヤン山と同様に雪山として取扱はれてゐない。この山は主として花崗岩から組成されてゐる様に思はれる。ベエマ・シヤンも亦雪嶺であり、北緯二十八度十分から二十八度二十五分の間に位して、メーコン、揚子江間の分水嶺をなしてゐる。長きに於て十五哩を超えないが五つの雪峰がある。その西側上には、水河がある様には思へない。が東側の水河からは、カリ Kari 河が流れ出てゐる。之等の水河の總ては、永年の後退を續けてゐることを示し、今日でもそれを續けてゐる。この山脈の全貌は Tungkhuing からアタンツェへの途上なる Mienchu Ia 及 Paima Ia 間の高臺から素晴らしい眺められる。カカルボからの眺望は、これより少し遠く又これ程明瞭ではない。この山脈の最高峰たる Taya の水河の一つでも見られなかつたならば、西側からは此の山脈は殆ど雪峰とは認められなう。

Taya のすぐ北には此の山脈を乗越す困難な峠があり、その踏跡は水河の脚部を横切つてゐる。この右手即ち北側には Atunze の谷に而して「死」水河があるけれども、雪の峰は一つもない。Taya には三つの顯著な水河があり、その南に位する Omaga にも二つの水河が見られる。そして Omgaga の彼方には二つのそれより低い山があつて、夫々一宛水河を有してゐる。之等の水河からの流れは、この山脈の西麓を北から南へ流るゝ深い溪谷へ注ぎ込んでゐる。そしてこの流れは次に明らかにする如く、カリ川の源流である様に思へる。カリ川はカリの部落のすぐ下方で合流する二つの流れの合體したものでなつた。この一つの流れの源であるカリ峠へは、右の合流點から丁度七哩程であり、ベエマ・シヤン谷の源頭へは北へ二三哩である。然し Davies の地圖にも示されてゐる通り、この合流點から主流の源流地迄は僅かに十四哩である。そしてこの北方からの主流はカリ峠からの支流よりも非常に大きい。この事から考へると、その主流が雄大な雪山の間から流れ出るのでなければ、共に同じ雨量をもつこの二つの流れの中、主流の方がカリ峠からの支流のたかゞ二倍の長さしかないことは考へられないことである。しかも此の合流點のカリ河は既に相當な流れを現出し、正に水河奔流の相貌を呈してゐる。Handel-Mazzetti 博士のこの流れの源に關する意見も私と全く同一であることを附加してをかう。

右の意見に替る可き唯一の説は、Tungkhuing のすぐ南西なる高い雪山の山からカリ川が流れ出ると云ふものである。が之に對しては何等證明がなされてゐない。ベエマ・シヤンからの水河の流れは、この山脈を越

える峠の途すがら横切るところの Taya の北面の水河から出てゐる。それは先づ北へ向つて流れ、そのピラミッド型の山の肩を巡つて東行し、その向きをかへる角には一つの水河湖を藏してゐる。が今日では水流の大部分はその湖の中へは入つてゆかない。そして遂に南方へむかつて流れ進むのである。ベエマ・シヤン東方の石灰岩の山脈から出る流れは、西へ若くは西南へ流れてこの主流に合流する。この山の寫眞は G. J. (48, P. 56, July 1916 及 56, P. 158, Sept. 1920) に掲載されてゐる。ギルは云ふ。ベエマ・シヤン若くは Paima Shan と云ふ支那流の名稱は、おそらくは古代のチベット名から翻譯されたか音譯されたものであらう。だが如何なる方法を以てしても今日のチベット流の命名法によつては、この結論は支持され得ない。彼は又附言して云ふ。今日のチベット名は N'geu-Iaka (N'geu ka Ia) の方が正しいのではないか?) 若くは Atunze の山であらう。

メーコン、揚子江間の分水嶺はたしかに水河に覆はれてゐたのであるが、今日では北 Yakalo 南 Westling の間に雪山を残してゐるのみであり、只 Atunze の東北方には數個の「死」水河が影を止めてゐる。私が今迄に見たどの地圖に於ても、ベエマ・シヤンは雪峯として扱はれ、又記されてゐない。この山脈は總て斑岩から成つてゐる様に思

ふ。カカルボからの眺望は、これより少し遠く又これ程明瞭ではない。この山脈の最高峰たる Taya の水河の一つでも見られなかつたならば、西側からは此の山脈は殆ど雪峰とは認められなう。

Taya のすぐ北には此の山脈を乗越す困難な峠があり、その踏跡は水河の脚部を横切つてゐる。この右手即ち北側には Atunze の谷に而して「死」水河があるけれども、雪の峰は一つもない。Taya には三つの顯著な水河があり、その南に位する Omaga にも二つの水河が見られる。そして Omgaga の彼方には二つのそれより低い山があつて、夫々一宛水河を有してゐる。之等の水河からの流れは、この山脈の西麓を北から南へ流るゝ深い溪谷へ注ぎ込んでゐる。そしてこの流れは次に明らかにする如く、カリ川の源流である様に思へる。カリ川はカリの部落のすぐ下方で合流する二つの流れの合體したものでなつた。この一つの流れの源であるカリ峠へは、右の合流點から丁度七哩程であり、ベエマ・シヤン谷の源頭へは北へ二三哩である。然し Davies の地圖にも示されてゐる通り、この合流點から主流の源流地迄は僅かに十四哩である。そしてこの北方からの主流はカリ峠からの支流よりも非常に大きい。この事から考へると、その主流が雄大な雪山の間から流れ出るのでなければ、共に同じ雨量をもつこの二つの流れの中、主流の方がカリ峠からの支流のたかゞ二倍の長さしかないことは考へられないことである。しかも此の合流點のカリ河は既に相當な流れを現出し、正に水河奔流の相貌を呈してゐる。Handel-Mazzetti 博士のこの流れの源に關する意見も私と全く同一であることを附加してをかう。

右の意見に替る可き唯一の説は、Tungkhuing のすぐ南西なる高い雪山の山からカリ川が流れ出ると云ふものである。が之に對しては何等證明がなされてゐない。ベエマ・シヤンからの水河の流れは、この山脈を越

える峠の途すがら横切るところの Taya の北面の水河から出てゐる。それは先づ北へ向つて流れ、そのピラミッド型の山の肩を巡つて東行し、その向きをかへる角には一つの水河湖を藏してゐる。が今日では水流の大部分はその湖の中へは入つてゆかない。そして遂に南方へむかつて流れ進むのである。ベエマ・シヤン東方の石灰岩の山脈から出る流れは、西へ若くは西南へ流れてこの主流に合流する。この山の寫眞は G. J. (48, P. 56, July 1916 及 56, P. 158, Sept. 1920) に掲載されてゐる。ギルは云ふ。ベエマ・シヤン若くは Paima Shan と云ふ支那流の名稱は、おそらくは古代のチベット名から翻譯されたか音譯されたものであらう。だが如何なる方法を以てしても今日のチベット流の命名法によつては、この結論は支持され得ない。彼は又附言して云ふ。今日のチベット名は N'geu-Iaka (N'geu ka Ia) の方が正しいのではないか?) 若くは Atunze の山であらう。

はれる。

ダモン Damyon は Tsaya と同じ岩から成つてゐる斑岩の隆起であり、カカルボと同じ山脈上に位してゐるが、カカルボの北の峯から四十哩程北に離れてゐて、その間には雪の峯は見られない。然しこの山脈の西部には数々の「死」水河がある。この峯の寫眞は G. J. (63, P. 7 July 1923) に掲載されてゐる。

ダモン山群は、メーコン河から Chiang Ka 川 (越え Yakalo 上方の二、三の峠からよく見える。之等の峠は北から Lhong La, Bi La, Kia La と呼ばれる。一九一一年に私は Lhong La を越え、其の當時私には Tamu と云ふ名で知られてゐたダモンの光景に接した。然し同年 Kia La を越えたバイレイ Bailey は、この山群がたま／＼雲にかくれてゐたので、見ることは出来なかつた。が一九二二年の九月に私が Kia La を次ぎ Bi La を越えた時には、その完璧な景観を恣にした。この山群には只二つの雪峯があるのみで、その間は鞍部をなし、その南峯が最高點である。ダモンの南東面には二つの水河があり、この二つは下方で結合されて一つの谷に注込んでゐる。この流れは Piu La からの支流を合して後、Legong の下方でメーコン川に合流する。

ダモンの水河は嘗ては非常に雄大なものであつたらしい。主溪谷の下方迄何哩にも亘つてゐた水河

は、今では、すつと小さくなつてゐる。ビチュ・ラも嘗ては水河に覆はれてゐたし、メーコン河岸のキイア・ラもそうであつたらうが、その何れにも、それを物語るべき只一つの「死」水河さへ残つてゐない。

ダモン峯へはレゴンの部落から奔流沿ひに北へその谷の源頭を経て比較的容易に達せられると思ふ。Mules はこの峯の水河の脚部迄達し得たが、その谷の奥へは行つてゐない。踏跡は、メーコンへ逆戻りする勞多い路以外何處へも通じてゐない。事實、その踏跡はこの山を迂回するのでなければ、それに突當つて了ふのであるけれど、往昔はこの山を一周する巡禮の路であつたのであらう。

ビチュ・ラはダモン山脈の南方を乗越してゐる。一方北方には Cio La 迄はこの山脈を越える路はな／＼。探検家 A. K. は Sambaduka からゴタイ・ラを越えたが、彼のこの地に於る觀察は總てそこからなされたものである。ダモンと云ふ名前はチベット語でも亦支那語でもない。おそらくそれは Moso から出たものであらう。或る地圖によるとそれは Kna kar po となつてゐるが、明らかにそれは間違ひである。ダモンの高度は、ほぼバハ・シヤンの高度と等しく、二〇、〇〇〇呎内外であらう。

ガンカリン Gangkaling

嚴密に云へば、ガンカリン山脈は雲南の山ではなく四川の山で、兩者の國境に近く位してゐる。が爰で一緒に述べた方が便利と思ふ。ガンカリンの山脈は三つの針狀峯からなり、その何れも、高度は一九、〇〇〇呎から二〇、〇〇〇呎の間である。

その位置について私は、Yungning の平原の二つの高峯からかなり正確に指摘することが出来ると云ふのはその觀察は既に、その平原の測定された基點からなされてゐるからである。この峯はユンニン湖の南端なる一峠からも見ることが出来、又ユンベヘの途上から、或は Muli 上部の斷崖からも見ることが出来る。更にその姿は東方遙く遠く Liang 川上方の臺地からも望むことが出来る。この山脈は Shoo 川の西に聳立し、Shoo 川の一支流は明らかに、この雪峯群にその源を發してゐる如くである。

Daves は彼が Kulu からムリへの途上ガンカリンを瞥見したが、それ以上には何も書いてゐない。又一九〇九年に Gangka Ling 僧院を訪れた Baed — 此處を訪れた歐洲人としては明らかに彼が最初にして最後であらう——は、この雪峯に近接してゐながらも、何等この山のことを述べてゐないのである。

この山脈は、その山麓にガンカリンと稱する僧院がある故に、ガンカリン (雪の場所) と呼ばれる様になつた。又その三つの峯の名稱は夫

夫 Gangka, Nyapo, Soni と云はれてゐる。

一九一九年版のチベット地圖 (印度測量局) は、雲南に雪山を殆ど記してない反面、四川には澤山にそれを載せてゐるのであるが、此の山脈の位する位置には高度一九、〇〇〇呎に達する約五十哩の大山脈が記入されてゐる。その高度はほぼ正しいが、山脈は地圖に示されてゐる程大規模のものではない。

ゴンバ・ラ Gonpa La

雲南のあらゆる雪峯の中で、この峯が一番知られてゐないものである。旅行家にしてこの峯を見たものは甚だ少なく、又それを越えた者は更に稀である。誰も未だ曾つてこの峯を探検し若しくは登つた者は無い。然し乍ら、かの卓越せる Handel-Mazzetti の地圖 (雲南旅行の) にはこの峯が示されてゐる。

ゴンバ・ラ (僧院の山) はサルウイン・イラワディ間の分水嶺上に位し且その位置はサルウイン河畔の Tramtang (Chiamtung) の部落の直ぐ上方、北緯二十八度二分の處である。その山名は Tramtang の僧院から由來してゐる。この峯はメーコン・サルウイン分水嶺上の數個の峠、殊に Jonde La (ドカアル・ラの直ぐ南) から、又は Ba-hang の上方なる Nyserrigo から見ることが出来、或は又 Kienan 上方の小さな峠からも眺められる。そしてそれは又サルウイン河畔から、即ち Tramtang から見ることも出来る。この部落は一方メーコン川とサルウイン川との間の相違を如實に物語つてゐる處でもある。

ゴンバ・ラはイラワディ川側から活動し始めた印度測量局の測量官の鋭敏な眼をさえのがれてきた様に思へる。この方面から眺めるとそれは餘りにも雄大といふ感からは遠い。事實一年中の大部分、サルウイン・イラワディ間の分水嶺は視界の外にある。たとへ一月から六月の間に、その僅かな眺めが得られたにしても、この峯なりや否や判斷することは困難であらう。然し乍ら私は異つた三箇所から十月乃至十一月の期間に三度この山を見ることが出来、そして東方からのこの山の確かな姿を窺ふことが出来るやうになつた。そこには只一つの雪峯があるのみで、サルウインに三つの水河を出してゐる。之等の二つは下方で一緒になり、斷崖を越えて主谷に這入つてゐる。第三番目の水河は、獨立した流域をもつが、更に下方で右の主谷に注ぎ込む。又更に今一つの

水河が北方に見られるが、之は前の三つのものより遙かに小さい。この峯の南西面には、一つのクローアルの上部 (小さなハンギング・グレイシヤ) がある許りである。

一九一六年の夏ゴンバ・ラを越えた Handel-Mazzetti 博士は私に書を書いて、ゴンバ・ラには水河なく、

只その南方數哩にあり彼が Schatka-
Pop と呼べる峯に小さな氷河がある
のみと云つてゐる。がこの説明は彼
自身の地圖から來たものではなく、
彼の地圖にはゴンバ・ラに一大氷河
が又 Schatka には大きな氷河の
残存が示されてゐる。十月には毎日
毎日この全山脈が見られたことから
して、この後者の存在については幾
分疑問があり、私はそれを遂に見つ
けることが出来なかつた。

ゴンバ・ラの高度は唯僅かにその
峠の高さから推定されうるのみであ
る。この峯はその峠から約三、〇〇
〇呎の斷崖をなしてそゝり立ち、そ
の高度約一七、〇〇〇呎位かと思は
れる。この氷河も嘗ては今より
も遙かに下方の谷迄延び擴つてゐた
ものであらう。ゴンバ・ラは、Tasya
ダムヨンの如く、石灰岩の上に置か
れた斑岩から主として組成されてゐ
る。

其の他の雪山

メーコン・サルウィーン間の分水
山脈中 Si-la の南方、約北緯二十
七度三十分——二十七度四十五分の
地域にも雪の峯がある。アタンツエ

上方の山から南望すると、この山は
その東面に巨大な雪原を有してゐる
爲、實に顯著なる姿をしてゐる。

この山脈上にはこの外に雪の峯
のあることを知らないが、Tandit-
Mazetti 博士は、カアル・ラの南方
には數個の「死」氷河があると云つ

てゐる。が同博士は右に私の述べた
二十七度四〇分にある雪峯の存在を
否定してゐるので、その解決は後の
旅行家に問題として残して置く。

チユ・ラとビチユ・ラの間には五
つの「死」氷河を數ふことが出來
るが、カカルボの最北峰とダムヨンの
間には雪峯は無い。

更に東方に於ては、ムリの上の方か
ら遙か東方に私は一雪峯を見た。そ
れはおそらく、リキヤン山脈が揚子
江の曲流の中にある如く、又ナムチ
ヤ・バルワ Nancha Barwa がツア
ンポー Tsangpo の曲流の中にある
如く、ヤールン川 Yalung の曲流の
中に位するものであらう。

ユーチユ Yichu の西岸にある、
ビチユ・ラから見ると、雪山は明ら
かに西藏本土の山である。そしてそ
れはサルウィーン・ユウ間の分水嶺
をなす。この山脈の東面には、ユウ
川に注ぐ八つの氷河を算へることが
出來た。

チユ・ラから見ゆる雪峯 Opor の
双峰も勿論この同じ山脈上に在る
が、この山はビチユ・ラからは見え
ない。

我最後に雲南の國境附近に一言を
加へやうと思ふ。が私はこの未知の
邊境について只次のことが言へるだ
けである。即ち今後この北西隅部に
更に新たな旅行が次々になし得ら
れ、更に數々の雪山にぶつから
うし、又更にその山々の位する大山
脈の相貌も明白となるであらうと。

の雪山の存在は、一部はそのより高
い高度に、又一部はその増加せる降
雨量に依るものである。然しそれを
距たる遙か遠くには、即ち降雨をさ
へざるヒマラヤの大屏風の彼方には
乾燥しきつた地方が展開し、雪山の
存在は再び頓に僅少となる。かくし
て此の地方で最も雪山の許多群立す
る地方と云へば、未だ測量せられざ
る北緯二十八度——三十度、東經九
十六度——九十八度の間の地域であ
ると思はれる。

更に又同じく未測量のチベット邊
境附近にも同様に美はしき雪の山々
があるであらう。そして此の地域に
こそ近傍での最高峰が存在すると私
は信ずるものである。ペエマ・シャ
ンから東北方遙か彼方にはビラミツ
ド型の巨大な雪山が見られた。それ
は揚子江を越へた東側、四川省にあ
るものである。その遠望から判斷し
た處に依ると、この山はカカルボよ
りも遙かに雄渾なるものに異な
いと思ふ。

以上
(五頁挿入の概念圖は、原文に附せ
るキングドン・ワード作成の詳細な
地圖を簡略化するもので、◎印は雪
山の位置を示すものである。)

日本山岳協會

關西展豫告

昭和十四年十月卅一日より

十一月五日まで

大阪大丸四階美術部に於て

戰線便り

齋藤松太郎

會の先輩諸氏に導かれる事二年
餘になり乍ら未だ一回も原稿を御送
りした事の無い仕末で何んとも申譯
なき限りです。

渡滿し遠く内地を離れて會報に接
した時には非常になつかしく感じ思
はすペンを取りました。當地神武屯
の模様を御送り致し度く思ひますが
何にしろ防諜上やかましいので多く
お話し出来ないのが甚だ残念です。

渡滿當時白衣におほはれて居た山野
を見た時にはスキーがほしいなア……
……と思ひました、吾々スツテン・ボ
ーレン、シリマークには持つて來い
のスロープで菅平、霧ヶ峰等は物の
數ではありません、實に廣いです。

其の零下四十度の冬も自分等内地
の冬山になれて居る者には左程にも
感じませんでしたが、其れでも春は待
ち遠しかつたです、其の春も遂に逝
きて夏となつてしまひましたが花盛
りは今も尙續いて居ます。其の美し
さは白馬岳の御花畑、西穂岳の御花
畑、又潤澤等に比ぶれば數百倍の廣
さと美しさです。

練習等に出て少息の時重いルツク
に非らずして背囊を降ろして御花畑
の中で遠き丘の上の夏雲を眺めなが
ら紫煙をくゆらせる時、内地の夏山
を思ひ出させます。

山が無性に戀しくなります、然し
國境警備の重任にある此の身ではど
うする事も出来ません。

又いつの日にか行けるであらう登
行を夢みて其れを楽しみにして居る
ばかりです。

先輩諸氏の御健康を祈ります。先
づは御伺ひまで亂筆にて失禮致しま
す。

豐田春滿

此度命により左記部隊附を被仰付
勇躍故國を出發途中無事着任致しま
した。

北支は今雨期に入り然も二十年來
の大雨とかで泥でかためた民家や土
塀が方々で崩れてゐるのが見られま
す内地は梅雨があがり夏山の季節と
存じます諸賢の御健闘を祈ります。

北支派遣水原部隊氣付倉田部隊

佐藤貞吉

前略 遙かに會員諸賢の御健康を
祝します。小生も到々大陸の地に參
り、目下〇〇にて任務達成に微力乍
ら力を到してゐる次第です、當地の
山は、略二千米突程度、しかし一寸
鋸岳を思はせる様な突出たる峰頭が
面白く見られるので相當目を樂しま
せてくれます。會員小早川博君と偶
然にも同じ隊に起居を共にしてゐる
のも奇偶です。先是簡單乍ら近況迄

北支派遣前田治部隊

兼重部隊塚田隊上主隊



會務報告

七月定例理事會

七月十一日(火)午後六時半 虎ノ門本會事務所

出席者 高頭、小島、冠、芥木、島山、三田、中村、津田、塚本、額田、黒田、加藤、野口、石原、藤島、吉澤、中司、十七名

一、山日記編輯報告

六月二十二日發賣、三三〇〇部、一部定價一圓三十錢、三一五〇部に對し印稅費受くること、内二六〇圓本月受入、殘額は十一月に精算の筈、會員割引のこと。

一、山岳三十四年一號編輯報告

第二號は京城大：小五臺山、沼井氏：臺灣登山史、神戸商大：次高紀行以上の豫定。

一、會報編輯報告

原稿はあれど編輯者と印刷所との間に連絡不充分の爲遅延し居れども兩者懇談の上何等かの方法を見出し、可及的早く發行のこととなる

一、實業團體懇談會の件

右團體中有力者を中心に九月頃懇談會開催のこと

一、滯納會費處理の件
一、新入會員詮考の件
一、社團法人に關する件
設立準備事務は進行のこと

第八十九回小集會(關西)

一、昭和十四年三月十六日於清交社
一、山岳と戰爭 會員青井竹三郎君
滿蒙北支の講演ばかりつづく小集會ではあるが之も事變下の山岳團體の集會としては當然の傾向であらう。

當夜は本事變に北支、中支と二回の從軍をされた青井君(大朝社勤務)により右演題の下に從軍記者としての體驗を聞く事になった。先づ北支從軍では包頭より忻口鎮の戰壕戰を経て太原に一番乗りされる迄の山岳戰、中支では廬山々麓附近の機械化部隊への從軍と、登山家だけに山岳地帯の戰爭にばかり参加されたその順路日程を略述の後從軍中のテント生活、裝備、感想などをスケッチ風に話され續いて豊富な小型映畫を一一説明の上映寫して頂き現地の様子を詳しく知る事を得た。時間がなくて中支のフィルム全部映寫出来なかつた事及歸國後間もなかつたので大部な大學ノートに詳記された戰闘日記や研究統計の整理未了によりその結果報告を開けなかつたのは惜しかつた。(富田記)

當日の出席者左の通り
晚餐會及講演會出席者
青井竹三郎 三木高嶺 津田周二

小川正十郎 宮崎武夫 富田健一
講演會出席者
木藤精一郎 西岡 一雄 山口季次郎
山田奈良雄 山口 堯市 若城豐次郎
阿江 正造 今川 良雄 山中正之助
西井 常造 桔梗谷 治山本 敏三
今西 壽雄 淺井 東一 金井 健二
根岸 元凱 玉置 七郎 色川幸太郎
前田 光雄 河本 俊彦
他に會員外八名

第九十回小集會(關西)

一、昭和十四年七月四日 於清交社
一、支那奧地事情

大阪時事新報主筆 北村佳逸氏
山岳會の小集會も近來一見精彩を缺く嫌ひあるも事變下にあつて登山行動そのものに相當變化を來してある現狀としては之また止むを得ない事であると同時にむしろその限定された範圍内で大いに深くほり下げて極東の山岳地帯を研究すべきでなからうかと思はれる。

當夜の講師北村氏は長く支那に居られたばかりでなくある種の調査で變裝の上單獨で新疆省まで入り或ひは香港大學で交換教授として講義された方だそうで支那奧地の事情に就いては詳しく御承知なので我々西北方に意を注ぐ者の等しく興味を持つ生活、風習、言語、交通等についてお話を伺ふ事にした。先づ晚餐會の席上では會員の質問に應じ種々奧地旅行の要點や苦勞を説明して頂いたが講演會席上では支那山岳全體の形

貌及山林政策を簡述の後ありふれた奧地の紹介はやめて詩的、哲學的、佛教的に見た支那山岳について話をすると聞き直されたのは意外だつたと同時に新な興味を誘起せしめられた。講師用意の漢詩のプリントを配布の上支那に於ける山岳の紹介及觀賞法などを三名山(峨眉山、廬山、天臺山)に例をとつて講述され參會者一同珍しいお話に興味を引かれ乍ら終り迄面白く拜聴出來た。引續いて會員よりの質問應答があつて九時半閉會せり。(富田記)

當日の出席者左の通り

晚餐會及講演會出席者
安藤 博 津田 周二 宮崎 武夫
富田 健一

講演會出席者

金谷 簡二 増本 茂 山口季次郎
若城豐次郎 金井 健二 小川正十郎
木藤精一郎 根岸 元凱 今西 壽雄
前田 光雄 淺井 東一 阿江 正造
法貴 六衛 西井 常造 西岡 一雄
他に會員外十三名

會員章再交付

一七八九番 京都市 岩見隣太郎

受贈會報部雜誌

國立公園協會 (國立公園)
 同長野縣支部 (中部山岳)
 東京アルカウ會 (アルカウ)
 日本アルカウ會 (アルカウ趣味)
 朋文堂 (山小屋)
 同 (山小屋クラブ)
 登山とスキー社 (登山とスキー)
 關東旅行俱樂部 (旅路)
 市役所山岳部 (部報)
 東京旅行クラブ (會報)
 關西徒步會 (ベデスツリアン)
 I M C 山岳會 (岩雪崩)
 M・Rグループ (爐端)
 がくれい會 (GRK)
 福岡山の會 (せぶり)
 俣松山岳會 (僱松)
 櫻友山岳會 (會報)
 昭和山岳會 (會報)
 明峰山岳會 (M S)
 獎健歩行會 (歩行)
 層雲山岳會 (會報)

頂山岳會 (頂溪)
 嶺溪會 (嶺溪)
 趣味登山會 (會報)
 朝鮮山岳會 (會報)
 大阪探險クラブ (白峰)
 日本ハイクینگクラブ (NH C)
 大阪ミテコー會 (山岳趣味)
 筑紫山岳會 (つくし)
 日本雪線山岳會 (雪線)
 東京登山溪流會 (會報)
 東市みなかみ會 (みなかみ)
 登高會 (會報)
 熊本アルカウ會 (會報)
 日本旅行協會 (ツリースト)
 魚市場山岳會 (會報)
 東京地學協會 (地學雜誌)
 横濱山岳會 (會報)
 廣島山岳會 (會報)
 名古屋山岳會 (會報)
 阪神山岳會 (山幸)
 臺灣山岳會 (臺灣山岳彙報)
 京都山岳會 (京都山岳)
 奈良山岳會 (みなかみ)
 山形山岳會 (會報)
 武藏山岳會 (登山)
 七十七銀行山の會 (泉ヶ嶽)
 山岳巡禮クラブ (ガムス)
 白樺旅行會 (登樺)
 東鐵やまをとこの會 (Yarwats)
 東京物理學校山岳部 (やまなみ)
 松山高校山岳部 (こしち)
 武藏高工山岳部 (山友)
 早大山岳會 (リックサック)
 八幡製鐵所山岳部 (會報)

山村民俗の會 (あしなか)
 水路部山岳會 (山岳會誌)
 山梨縣景勝地協會 (甲山峽水)
 霧の旅會 (霧の旅)
 關東岳愛會 (黒木立)
 下關山岳會 (會報)
 全日本徒步旅行聯盟 (徒步旅行)
 The Mountaineer 48
 La Montagne 36
 De Bergids 48
 Appalachia 48
 The Prairie Club 48
 Planinski-Vestnik 47
 Die Alpen 47
 S. T. F. 47
 The Himalayan Club 1939
 The Geographical Journal 48
 Trail and Timberline 48
 Union Ligue Eursionisti No. 1-2,3-4
 Le Alpi 47
 Sierra Club Bulletin 47
 Natural History 47
 Revue Alpine No. 320, 321
 The Canadian Alpine Journal
 The Alpine Journal
 The Scottish Mountaineering Club Journal
 The American Museum of Natural History 1938
 Alpi Venoste Passiric-Bretonie
 寄贈圖書
 甲斐の落葉 山中共古著 木村 鐵吉氏

山を愛して二十年 三田尾松太郎著
 山と溪谷 田部重治著第一書房 殿
 GAKUTO 三冊 丸 善 殿
 蒙古の自然と文化 京城帝國大學
 大陸文化研究會長 速水 滉氏
 山と關ふ(山岳寫眞傑作集)
 東京朝日新聞社編 島田 巽氏
 臺灣國立公園寫眞集
 臺灣國立公園協會殿
 岩と氷雪への登攀技術(海野治良高
 橋照共著) 好日山莊 殿
 槍・穂高・上高地 小島六郎著
 立山・御岳 小笠原勇八著
 日光・鬼怒高原 矢島市郎著
 以上三冊 三省堂 殿
 登高記 横有恒作(深田久彌脚色)
 AK放送臺本 放送協會 殿
 富士と其附近の山 春日俊吉著
 登山とスキー社殿
 峠 深田久彌編 青木書店 殿
 奥羽の山々「夏山」 秋田營林局編
 神谷 恭氏
 昭和十四年九月廿九日印刷
 昭和十四年九月三十日發行
 東京市豐島區池袋四ノ四五八
 發行兼編輯 石 原 巖
 東京市芝區榮平町(不二屋ビル)
 發行所 日本山岳會
 電話(四三)一六四九
 振替東京四八二九
 東京市芝區濱松町一丁目十三番地
 印刷者 植田 庄 助
 印刷所 成文堂印刷所